



戦国の四公子① (孟嘗君と食客)

3月①のごあいさつ

山内公認会計士事務所

2023年3月1日(水)

戦国時代も中期を過ぎる頃から、西の強国、秦の台頭が著しく、国際政治の勢力バランスは、大きく崩れていく。

この戦国末期、動乱の時代を彩った四公子として、齊の孟嘗君、趙の平原君、魏の信陵君、楚の春申君が異才をはなった。

孟嘗君の父田嬰は、齊の威王の末子で四十人の子があった。孟嘗君は5月5日に生まれたため田嬰は「育ててはいけない。すぐ捨てるように」とその妻に命じた。しかし、妻は隠して孟嘗君を育てた。

やがて青年になった時、兄弟のとりなしによって父子の対面をさせることにした。初めて孟嘗君が育ったことを知って父の田嬰は、かんかんになって妻を責めた。

“捨てよと命じたのになぜ育てた！”

すると孟嘗君がうやうやしく進み出て、「恐れながら、5月5日生まれの者を捨てよとおっしゃる理由をお聞かせ下さい」、「5月5日生まれの人間は、身の丈が戸口の高さに達すると親を殺すと言われるからだ」、「では、人間の運命は戸口から授かるものでしょうか？」。父が答えられずにいるのを見て「運命が天から授かるものならばともかく、戸口から授かるものならば、戸口を高くして、身の丈が届かぬようにしてしまえば、それで済むことです」と、言った。

孟嘗君は父の後を継ぎ、領主となり、諸国からの食客を招いた。逃亡中の罪人までやってきたが、財産を投げうって、身分の差別もなく、公平に手厚くもてなした。かくて、食客の数は数千人に達した。

孟嘗君が齊の王命によって秦へ使いた。秦の昭王は孟嘗君を迎えると秦の宰相にしようとした。これには齊を第一に考えて秦に害すると、強硬な反対意思が出て、孟嘗君を監禁し、機を見て誅殺しようということになった。

孟嘗君は昭王の愛妾に使いを出して、釈放に尽力してくれるように頼んだ。すると相手は、“狐のわき毛で仕立てた最高級のコート”を要求した。ところがこのコートは既に昭王に貢上している。その時末席から“コソドロの名人”という男が名乗り出、「私にお任せ下さい」と夜になって王宮の蔵に忍び込み、例のコートを盗み出し、それを愛妾に渡し、孟嘗君は釈放された。

釈放されて秦を脱出しようとしたところ、真夜中に函谷関に到着した。関所は鶏がときを告げるまでは門を開けない。その時、またも食客の末席から、“鶏の鳴き声”の名人という男が進み出て、この男が鶏の鳴き声をまねると、たちまちあたり一帯の鶏がときをあげ、関所の門は開いた。

参考：(司馬遷史記、孟嘗君列伝、徳間書店)